

H₂ 受容体拮抗剤

日本薬局方 ファモチジン錠

薬価基準収載

ファモチジン錠 10mg 「クニヒロ」

ファモチジン錠 20mg 「クニヒロ」

Famotidine Tablets 10mg 「KUNIHIRO」

Famotidine Tablets 20mg 「KUNIHIRO」



禁忌（次の患者には投与しないこと）
ファモチジンに対し過敏症の既往歴のある患者

効能効果、用法用量、禁忌を含む使用上の注意等については、DI 欄をご参照下さい。

製造
販売元

皇漢堂製薬株式会社

医薬営業部

兵庫県尼崎市長洲本通 2 丁目 8 番 27 号

TEL : 06-6482-5115 FAX : 06-6482-7492

2014 年 6 月作成（第 1 版）

ファモチジン錠 10mg 「クニヒロ」 Famotidine Tablets 10mg 「KUNIHIRO」

ファモチジン錠 20mg 「クニヒロ」 Famotidine Tablets 20mg 「KUNIHIRO」

Drug Information

組成・性状	
販売名	ファモチジン錠 10mg「クニヒロ」 ファモチジン錠 20mg「クニヒロ」
成分	ファモチジン(日局)
含量(1錠中)	10mg 20mg
添加物	乳糖水和物、トウモロコシデンプン、結晶セルロース、ヒドロキシプロピルセルロース、低置換度ヒドロキシプロピルセルロース、ステアリン酸マグネシウム、ヒプロメロース、マクロゴール 6000、酸化チタン、カルナウバロウ
色調・性状	白色〜微黄白色のフィルムコーティング錠である。
外形・サイズ	表 裏 断面 直径: 6.7mm 厚さ: 3.7mm 重量: 120mg
	表 裏 断面 直径: 7.2mm 厚さ: 3.8mm 重量: 140mg
識別コード	KSK131 KSK132

	ファモチジン錠 10mg「クニヒロ」	ファモチジン錠 20mg「クニヒロ」
日本標準品分類番号	872325	
承認番号	22500AMX00339000	22500AMX00340000
承認年月	2014年4月	2014年4月
薬価収載	2014年6月	2014年6月
販売開始	2014年6月	2014年6月
使用期限	製造後3年	
貯法	室温保存(気密容器)	
包装	PTP100錠(10錠×10)、1000錠(10錠×100) 1000錠(バラ)	

禁忌 (次の患者には投与しないこと)

本剤に対し過敏症の既往歴のある患者

効能・効果

胃潰瘍、十二指腸潰瘍、吻合部潰瘍、上部消化管出血(消化性潰瘍、急性ストレス潰瘍、出血性胃炎による)、逆流性食道炎、Zollinger-Ellison症候群
下記疾患の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、浮腫)の改善
急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期

用法・用量

胃潰瘍、十二指腸潰瘍、吻合部潰瘍、上部消化管出血(消化性潰瘍、急性ストレス潰瘍、出血性胃炎による)、逆流性食道炎、Zollinger-Ellison症候群
通常、成人にはファモチジンとして1回20mgを1日2回(朝食後、夕食後または就寝前)経口投与する。また、1回40mgを1日1回(就寝前)経口投与することもできる。
なお、年齢・症状により適宜増減する。ただし、上部消化管出血の場合には通常注射剤で治療を開始し、内服可能になった後は経口投与に切りかえる。

下記疾患の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、浮腫)の改善

急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期
通常、成人にはファモチジンとして1回10mgを1日2回(朝食後、夕食後または就寝前)経口投与する。また、1回20mgを1日1回(就寝前)経口投与することもできる。
なお、年齢・症状により適宜増減する。

用法・用量に関連する使用上の注意

腎機能低下患者への投与方法

ファモチジンは主として腎臓から未変化体で排泄される。腎機能低下患者にファモチジンを投与すると、腎機能の低下とともに血中未変化体濃度が上昇し、尿中排泄が減少するので、次のような投与方法を目安とする。(1)腎障害のある患者では、血中濃度が持続するので、投与量を減ずるか投与間隔をあけて使用すること。

(1回20mg1日2回投与を基準とする場合)

クレアチニンクリアランス(mL/min)	投与方法
Ccr ≥ 60	1回20mg 1日2回
60 > Ccr > 30	1回20mg 1日1回
	1回10mg 1日2回
30 ≥ Ccr	1回20mg 日2~3日に1回
	1回10mg 1日1回
透析患者	1回20mg 透析後1回
	1回10mg 1日1回

使用上の注意

1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること)

- 薬物過敏症の既往歴のある患者
- 腎障害のある患者〔血中濃度が持続するので、投与量を減ずるか投与間隔をあけて使用すること。〕
- 心疾患のある患者〔心血管系の副作用を起こすおそれがある。〕
- 肝障害のある患者〔症状が悪化するおそれがある。〕
- 高齢者〔「高齢者への投与」の項参照〕

2. 重要な基本的注意

治療にあたっては経過を十分に観察し、病状に応じ**治療上必要最小限の使用**にとどめ、本剤で効果がみられない場合には他の療法に切り替えること。なお、**血液像、肝機能、腎機能等に注意**すること。

3. 相互作用

併用注意(併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
アゾール系抗真菌薬 イトラコナゾール	左記の薬剤の血中濃度が低下する。	本剤の胃酸分泌抑制作用が左記薬剤の経口吸収を低下させる。

4. 副作用

本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。

(1)重大な副作用(頻度不明)

- ショック、アナフィラキシー様症状:** ショック、アナフィラキシー様症状(呼吸困難、全身潮紅、血管浮腫(顔面浮腫、咽頭浮腫)、蕁麻疹等)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 再生不良性貧血、汎血球減少、無顆粒球症、溶血性貧血、血小板減少:** 再生不良性貧血、汎血球減少、無顆粒球症、溶血性貧血、血小板減少(初期症状として全身倦怠感、脱力、皮下・粘膜下出血、発熱等)があらわれることがあるので、定期的に血液検査を実施し、異常が認められた場合には直ちに投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson症候群)、中毒性表皮壊死症(Lyell症候群):** 皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson症候群)、中毒性表皮壊死症(Lyell症候群)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、このような症状があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 肝機能障害、黄疸:** AST(GOT)、ALT(GPT)等の上昇、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 横紋筋融解症:** 横紋筋融解症があらわれることがあるので、高カリウム血症、ミオグロビン尿、血清逸脱酵素の著明な上昇、筋肉痛等が認められた場合には直ちに投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- QT延長:** QT延長があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。特に心疾患(心筋梗塞、弁膜症、心筋症等)を有する患者においてあらわれやすいので、投与後の患者の状態に十分注意すること。
- 意識障害、痙攣:** 意識障害、全身痙攣(痙直性、間代性、ミオクローヌス性)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。特に腎機能障害を有する患者においてあらわれやすいので、注意すること。
- 間質性腎炎、急性腎不全:** 間質性腎炎、急性腎不全があらわれることがあるので、初期症状として発熱、皮疹、腎機能検査値異常(BUN・クレアチニン上昇等)等が認められた場合には直ちに投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 間質性肺炎:** 発熱、咳嗽、呼吸困難、胸部X線異常等を伴う間質性肺炎があらわれることがあるので、このような場合には投与を中止し、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。

(2)重大な副作用(頻度不明)

不全収縮: 意識障害、他のH₂受容体拮抗剤で不全収縮があらわれるとの報告がある。

(3)その他の副作用

	頻度不明
過敏症 [※]	発疹・皮疹、蕁麻疹(紅斑)、顔面浮腫
血液 [※]	白血球減少、好酸球増多
消化器	便秘、下痢・軟便、口渇、悪心・嘔吐、腹部膨満感、食欲不振、口内炎
循環器	血圧上昇、顔面潮紅、耳鳴、徐脈、頻脈、房室ブロック
肝臓	AST(GOT)上昇、ALT(GPT)上昇、AL-P上昇、総ビリルビン上昇、LDH上昇、肝機能異常、黄疸
精神神経系	全身倦怠感、無気力感、頭痛、眠気、不眠、可逆性の錯乱状態、うつ状態、痙攣、意識障害、めまい
内分泌系 [※]	月経不順、女性化乳房、乳汁漏出症
その他	CK(CPK)上昇、味覚異常、筋肉痛、背部痛

注)これらの症状があらわれた場合には投与を中止すること。

5. 高齢者への投与

高齢者では、本剤を減量するか投与間隔を延長するなど慎重に投与すること。[本剤は主として腎臓から排泄されるが、高齢者では、腎機能が低下していることが多いため血中濃度が持続するおそれがある。]

6. 妊婦・産婦、授乳婦等への投与

- 妊婦等:** 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。[妊娠中の投与に関する安全性は確立していない。]
- 授乳婦:** 授乳婦に投与するときは授乳させないよう注意すること。[母乳中に移行することが報告されている。]

7. 小児等への投与

低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児等に対する安全性は確立していない。(使用経験が少ない。)

8. 適用上の注意

薬剤交付時: PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。(PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔を起して縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することが報告されている。)

9. その他の注意

本剤の投与が胃癌による症状を隠蔽することがあるので、悪性でないことを確認のうえ投与すること。

*詳細は添付文書等をご覧ください。「禁忌を含む使用上の注意」の改訂に十分ご留意下さい。

